

## ディスカッション

# 「ウッドデザイン賞が

# 目指すもの」

今年度、初めて実施された、「ウッドデザイン賞2015」の傾向と評価、今後の展望、新たな木づかいのもたらす可能性について、審査委員の方々をお迎えしてディスカッションを行いました。

ファシリテーター…赤池 学氏

パネラー…(第1部)益田文和氏／手塚由比氏／山崎 亮氏／

伊香賀俊治氏／三谷龍二氏／吉田 誠氏(林野庁 林政部木材利用課長)

(第2部)山田 遊氏／戸村亜紀氏／高橋正実氏／鈴木恵千代氏



**赤池** ウッドデザイン賞の審査をお願いしている気鋭の専門家の方々から、第1回のウッドデザイン賞の審査を経て感じたこと、考えたことについてお話を伺いたいと思います。まず、今回の審査を終えて、何を感じになったか、お聞かせいただけますか。



赤池 学氏

**益田** 木は日本文化を支えた中心的素材でした。本来、私たちの暮らしは住まいから日用品まであらゆるものが木でつくられていました。それが時間とともに

に、利便性や量産化、コストなどの要因から、金属や樹脂素材にとって代わってきたのです。今、考えるべきは、暮らしにあるものを全て木でつくることを基本として、できないものは別の素材でつくるくらいの発想が必要ということだと思います。そうしたイノベーションのデザインを期待したいと思います。



益田文和氏

**手塚** 個人的にも木造建築は好きで、いろいろと取り組んでいます。今回、審査を経て、実に幅広く、独創的で素晴らしい取組が全国で展開されていることを知り嬉しく感じました。その意味では、木を



手塚由比氏

見直す時代がやってきたと感じています。一方で、評価の視点としては木をただ使っているというだけでは難しく、部門のテーマに則った機能性やデザインが優れ

ていることを含め、完成度が高いものが選ばれたと思います。

**山崎** コミュニケーションの視点で評価をする際にいつも思うことは、アウトプットであるプロダクトだけが美しい、あるいはプロセスや仕組みが素晴らしい、そのどちらかが優れているだけではだめということです。取組や活動の持つ価値をいかに伝えるか、知ってもらうかを考える時、その両方を満たしていないと伝わりません。コミュニケーション分野としては、木の良さを伝える「仕組み」を評価しています。「伝え方のデザイン」を掘り下げることが重要です。



山崎 亮氏

**伊香賀** 木を使うことは、定性的にも直観的に良いと誰もが思っています。技術・研究分野では、定量的にしつかりと伝えているか、科学的エビデンスを整えているかという視点から審査しました。意欲的な試みがいくつも見られましたが、人間の健康や心理に与える影響を定量的に押さえて研究が最も印象に残りました。ですが、こうした取組まだまだ少な

いのが現状です。多くの研究者、実務家が協働して科学的エビデンスを蓄積し、社会へわかりやすく伝えることが重要だと考えます。



伊香賀俊治氏

**三谷** 私は木工をやって30年近くありますが、工芸と工業製品とはまだ距離があると感じています。審査を通じて、これほど木に関わっている人が多いということは嬉しく感じました。一方で生活者に訴えるうえで、デザインが非常に大事だと改めて感じました。取組は素晴らしくても、デザインの詰めが甘いものも多く、そこは残念なところですね。木は柔らかく素材なので、デザインが甘くなることも多い。木製品のデザインにはまだやるべきことも多いと感じました。



三谷龍二氏

**吉田** 受賞作品を見ますと、心のこもっ

た、木の魅力を引き出しているものが多く感じました。それゆえ、良いデザインの中に使われた素晴らしい技術や、それを日本の木でつくる時の苦労なども伝えていかねばならないと思っています。地域の良い取組や活動もたくさんありますが、それが持続的なものになるには、経済活動と一体でないと難しい。取組がビジネスと両立している優良な事例を世の中に広めていくことが私たちの使命だと考えています。



吉田 誠氏

**赤池** ありがとうございます。今の内容を受け、今回の審査で印象に残った作品はありましたか。評価したポイントも含めてお話しいただけますか。

**益田** 「ケロリン木桶」は納得しました。桶は従来から身近にあった日用品の原型のようなもので、これを木製に置き換えることで、私たちの持つ価値観が蘇ってきます。懐かしさを感じたり、ほっとしたります。記憶のコミュニケーションとして存在しています。木製品はこうしたものであるべきと考えています。「間伐

材もく糸クロス」も印象に残りました。かつて衣食住と木が切り離せない関係でした。身近にある木を使いながら、新たなテクノロジーが加味されることで、そこへまた戻っていく流れを感じられた点がよかったですと思います。

**手塚** LIXILの「連続開口設計サポート」が印象に残っています。構造設計はなかなか難しく、これを一般化した点はとても良い取組だと思います。日本の木造建築で一般的であった採光や風通しの良さなど、失われてきた価値を再認識させるものでした。また複数のオフィス家具メーカーが木質空間を打ち出している点も共感しました。こうした分野で木の価値が社会へ発信されれば、私たち建築家もより選択肢が増えると思います。

**山崎** 「西栗倉・森の学校」には以前から注目していました。デザイナーや地場の事業者が、川上から川下までの仕組みを考えることは非常に難しい。それを具体化してきた点は素晴らしいと思います。仕組みをわかりやすい形で発信し続けており、他地域での横展開の可能性を感じました。また、「アベマキ学校机プロジェクト」も印象的でした。5年生から山に入って森林のことを学び、6年生になつて天板を製作し新入生に贈る。地場産材を使いながら、無理のない、しなやかなサ

イクルを学校教育の中に持ち込んでいる点に共感しました。プロダクトの美しさ、そのプロセスの中にどのような思いや物語があるのか、それがセットできちんと伝わってきます。

**伊香賀** 自宅の木質化の経験は誰もが  
できる経験ではありませんが、「ウッド  
キューブ」や「やまなみ保育園」などは、そ  
こに行けば体験できる施設で社会的意  
義が高いと思います。さらに、そこで科学  
的エビデンスがとれるとなお有益です。  
ウッドキューブであれば、子どもたちがそ  
こでどういう行動をするのか、どこに集  
まって遊んでいるのかのデータを採り蓄  
積することでエビデンスになります。保育  
園は長時間その場所で過ごすため、子ど  
もの行動は鉄筋コンクリートの建物とは  
明らかに異なるはずなので、データ分析  
をすると良いと思います。科学的エビデ  
ンスがあれば木の良さを定量的に伝えら  
れ、さらに広がっていくのではないかと考  
えます。

**三谷** 私は良いもの、悪いものを区別す  
る際に、長く使って飽きのこないもの、と  
いう基準を持っています。その時の自分の  
判断だけではなく、時間の経過によって  
出てくる良し悪しも大切な点です。それ  
は長く作り続けることにもつながり、そ  
のためにも長く残っていくデザインは重

要です。その視点で見ると、飛騨産業の  
「HIDA FLOORING」の圧縮  
杉は、木目がきれいにできて、木の持つ  
可能性を引き出していると感じまし  
た。家具では、ワイス・ワイスやカリモク  
といったメーカーもデザインにしっかりと  
した考えを持って取り組んでいると思  
いました。

**吉田** 個人としては、「飢肥杉仮面」が  
とてもユニークで印象的でした。「或る列  
車」も非常に豪華な空間で、木を使うこ  
とで地元へ愛されていると思います。林  
野庁では木育を推進していますので、  
「ウッドキューブ」や「アベマキ学校机プロ  
ジェクト」「ウッドスタート」など、子ども  
たちや家族が木の良さを味わい、木を使  
う良さを常日頃から感じてもらえる取  
組にも共感しました。

**赤池** ありがとうございます。では、今  
後のウッドデザイン賞へ期待したいこと、  
あるいは次回以降へ向けて、ご助言など  
あればお願いします。

**益田** 圧倒的に数が増えていくことが  
重要でしょう。審査としては今後、さら  
にハードルは高くなっていくと思います。  
繰り返しになりますが、すべてまず木で  
つくることを考える。それによって、自ず  
とさまざまな技術や加工法が生まれて

きます。持ちやすさや美しさも付加さ  
れていきます。これからは、工芸の世界  
と工業製品の世界の距離を埋めていく  
ことも重要でしょう。双方の世界を行  
き来できるような産業になるとよいと  
思います。

**手塚** 木は生きていた証が木目に残って  
います。木でできていて、時間を経て残る  
ものは美しいのです。その美しさを再発  
見できる作品があると良いと思います。  
木でできているから良いのではなく、木で  
あるからこそ美しい。そうした製品や建  
築がウッドデザイン賞を通じて社会に広  
がっていくことを期待します。

**山崎** 街づくりやコミュニティデザインと  
いう分野で仕事をしていつも思うのは、  
正しいことと美しいことが両立していな  
いと広がらない、ということです。木を使  
うことが正しいのは理解されていると思  
いますので、そこに美しさや楽しさをいか  
に加えていくかが重要です。コミュニケー  
ション分野は、背景や仕組みがすぐには  
見えにくい。仕組みの図式化やプレゼン  
テーションの美しさ、プログラムの楽しさ  
を伝える工夫も重要です。そうした提  
案に期待したいと思います。

**伊香賀** 会議などで訪れる官庁舎や公  
共施設が木質化されているとほっとする

ものです。同じように、オフィスの木質化  
によって、職員のストレス低減や作業効率  
の向上など、科学的エビデンスが採れると  
説得力が増すのではないのでしょうか。今  
後、そうした研究や調査が増えることを  
期待します。

**三谷** 工芸と工業製品がもっと近づくべ  
き、という意見に賛同します。工芸は手  
作りであり、工業製品とはスピード感も  
違います。しかしスピードや量だけでは、  
すでに時代は立ちいかなくなっている。だ  
からこそ、プロダクトや木への見直しが  
今、行なわれているのでしょう。工芸には  
それに応えるヒントがあるのではないかと  
思っています。工業デザインと生活工芸の結びつきが増  
え、暮らしの中に欲しいものが生まれて  
いくことが必要だと思います。

**吉田** ウッドデザイン賞が人材育成につ  
ながることも期待しています。木造建築  
を実現しようと思っても、現実には設計  
ができる人は少ないのです。受賞作を見  
て、自分も木造設計をやりたいと思う人  
が増えれば、嬉しい限りです。コミュニ  
ケーション分野を始めとして、多くの取  
組に木に携わる人の熱意を感じました。  
良質な取組を後押しするためにも、ウッ  
ドデザイン賞の認知度をさらに高めてい  
くことが重要だと考えています。

**赤池** ここからは第2部として、ウッドデザイン賞とその受賞者が消費者にもたらすメリットや市場の広がり、新たな連携について、専門家の視点から意見をいただきます。まず、審査を終えてのご感想、ご意見をいただきたいと思っています。



**山田** バイヤーの立場から申し上げますと、商品を100点見ても、扱いたいと思えるものは10点以下、つまり打率1割以下が現実です。バイヤーの目に適うことは非常に難しい。その点から見ると、今回の受賞数は応募数の約5割もあり、こうした現実と一致していません。恵まれている評価結果であったと言ってよい。もちろん良い物もありましたが、良い物の価値を、今後も作り手と売り手が協力して顧客に届けていく必要があります。

ウッドデザイン賞として、今後もレベルの底上げは必要だと感じました。



山田 遊氏

**戸村** 私は審査を進めながら、木には多くの種類があつて、食の世界と同様、木の種類と産地と特性をもっと楽しく伝えられる方法はないものだろうか、と考えていました。この木は成長が遅いから硬くてこんな使い方に向いている、といったストーリーを伝えれば、見た目の好き嫌いや流行に左右されないものづくり環境がもっと整ってくるのではないのでしょうか。そのためには、売り場やメディアに、木の種類や使い道を伝える、地域性を伝える、木の特性を超えて技術のことを伝えるなど、木に関する知識をより楽しめるような取組も大切だと考えています。



戸村亜紀氏

**高橋** 審査を通じて、この国の木への想

い、歴史、知識のレベルの高さを感じました。かつて木が少なかった時代には木を使いたくても使えなかった。コンクリート建築物へと流れた背景には、こうした理由があつたのだと思います。しかしその間にも、木の可能性を思い描いていた。この時期にウッドデザイン賞が生まれたことの意味はまさにここにあると思います。日本人の木への可能性を感じる事ができる、それをダイナミックに表すような提案が出てくるとよいと思います。



高橋正美氏

**鈴木** まず、応募数の多さには圧倒されました。審査会場の空間は木製品で埋め尽くされていましたが、むしろ木の優しさを感じることで、不思議と疲れなかつたことを記憶しています。西洋が認めたのは日本の木の「文化」ではなく、木の「文明」でした。ウッドデザイン賞が



鈴木恵千代氏

くりだそうとしている流れは、これからの日本の木の文明をもっと高みにあげていくのではないかと、木をさらに深く追求すると日本の木がより活性化するのではないかと、思いました。

**赤池** それぞれの御立場からの御意見、御提案ありがとうございます。ではそのなかで、印象に残った作品はありましたでしょうか。

**山田** 仕事でも使うのですが、「阿蘇くまもと空港」の木質空間の良さは記憶に残っています。ほっとするような、落ち着いたような感じがする空間だと思います。「ブナコ」のランプは15年ほど前のバイヤー時代から知っている製品ですが、昨年、初めて製作の現場を見ることができました。製造プロセスを体感でき、購入を決めました。日本っぽさにこだわり過ぎることなく、優しく見え過ぎない点も新鮮で、外資系ホテルなどから人気がある理由ではないかと感じています。

**戸村** 「木レール」は印象的な活動でした。木を使う取組としての評価もそうですが、活動そのものを屋外に持ち出して、地域の人に参加の場を提供し、子どもだけでなく大人も喜んでいる様子が伺えました。「竹中大工道具館新館」は木の良さ、すごさだけでなく、道具にも

焦点を当てている点が素晴らしいと思います。大工や木工を支える道具の産地も苦労している現状があるなかで、そこに関わる人を支えることも重要な視点です。

**高橋** 「めぐる」は生涯使い続けることができる、障がいのある人の能力に着目してものをつくり雇用もつくる、修理の際には若い人の仕事にもなる、など木を通じてさまざまな人の仕事をつくっている点が秀逸だと思います。国産漆のシェアはすでに1%になっていると聞きましたが、製品が売れば森へ還元される仕組みも重要だと思います。

**鈴木** 「あたらしい家 校倉」は美しい空間で、トレーサビリティもしっかりしている取組だと思います。美しい空間をつくる背景にはきちんとした仕組みがある、ということに改めて気づきました。「100年杉のsimchhair」は非常に軽く、小指一本で持てるほどです。腕のある職人が本気で木と向き合った時は、本当にすごいものをつくるな、と感じました。「富山県産虫喰い楕フロリング」はとても好きな製品でした。自分が見ても使えたいものがたくさんあり、これらをマネジメントする仕組み、ウッドデザインプロデュースのような形を考えていければと思っています。

**赤池** ありがとうございます。では最後に前半同様、今後のウッドデザイン賞へ期待することをお聞かせください。

**山田** 木工産地、林業産地を訪ねると、たびたび厳しい現状に出合います。消費者の心理に響くためには、優しい、温かい、職人のすごさといった価値も大事ですが、こうした事実を伝えることも大事で、産地を応援する文化があってもよいと考えています。技術を途絶えさせたくない、というメッセージを消費者にダイレクトに伝えることも必要ではないでしょうか。木の魅力も現状も、丁寧にまっすぐに伝えていく。ウッドデザイン賞ではこうした製品や取組に出合うことを期待します。

**戸村** 私は海外へ輸出できるようなものづくりを期待したいと思います。以前、デンマークのデザイナーと話をしていた時、「日本のデザインはまだ付加価値ですね」と言われたことがあります。流行に左右されて作り替えるものではなく、いかに定番をつくるか、を考えるべきだと思います。中小企業でも最近はクラウドファンディングや在庫を抱えずに売れたものだけをつくって売る仕組みも登場しています。私も農業に携わっていますが、現代人の体型に適した、木を使った道具

の提案などもあってよい。それが海外で売れるかもしれないと思います。

**高橋** 消費者は背景にある物語を知りたいと思っています。物語を「見える化」することが何よりも大切です。今回、プレゼンテーションの内容だけでは、物語が伝わってこない作品も多く見られたので、そこを磨くことは重要です。また、今のライフスタイルに照らし合わせて、多様な視点から木の可能性を探ることで活路が拓けると思います。同様に審査委員も大きな視点から見ることが重要になってくるでしょう。ウッドデザイン賞の趣旨に則り、消費者目線で皆さんの仕事をブラッシュアップしていけば、日本の産業力を高めることにつながると思います。

**鈴木** 今回は杉を使った提案が多く、意外とヒノキの活用は少なかったように思えます。今後、もっと広葉樹にもフォーカスすべきでしょう。現在、空間をつくる際に使える樹種は20種類ほどと聞いています。受賞者を訪ねて話を聞いていますと、どれも使いたくなるものばかり。おそらく消費者も同じ感覚のはずです。ただそれには、はっとするようなもの、インパクトのあるものでないとダメだということ。ウッドデザイン賞を通じて、そうしたものに巡り合えれば嬉しいと思います。

**赤池** ありがとうございました。CSV (Creating Shared Value) 共有価値の創造)を提唱したマイケル・ポーター氏にお会いした際に、ユニークになるために戦う企業になれ、彼はそれ以外に未来はない、と話してくれました。そのためには他社がやらない独自の事業構想を持つこと、それを形にして顧客に届けるバリューチェーンをつくること、そしてやらないことを決めることだ、ということでした。

あらゆる製品やサービスは、事業益のみではなく、公益性にも投資していること、それを消費者へ伝えることが重要だと思っています。大手企業は社会啓発も含めた事業に取り組んでいく。中小堅企業は、大企業がやれない、ユニークなものづくりを進めていくことで活路が見えるのではないのでしょうか。産地は川上、川中、川下の新しいバリューチェーンをつくり、そこに消費者も参画していただく。その結果として、木づかいの価値や市場も拡大すると思います。さまざまな気づきを糧にしながら、ウッドデザイン賞を今後も育てていきたいと考えています。本日はありがとうございました。

(本記事は2015年12月10日に東京ビッグサイトで行なわれたシンポジウムを再編集したものです。)